

# 岩手日報

発行所 岩手日報社  
盛岡市丸の内3番7号  
郵便番号 020-8622  
電話番号 019(653)4111  
振替口座 02360-6-20番  
©岩手日報社2011

## 物資支援 なお必要

民間ボランティア団体が連携した被災者対象の物資支援配布会は30日、宮古市で開かれた。ふとんや毛布、携帯カイロなど厳しい冬の到来に備えた生活必需品が並ぶ会場では、一時約600人がためて継続支援の必要性を痛感していた。

## 提供「自粛」に不満も



冬に備え支援物資の毛布に手を伸ばす被災者。生活再建に向けた継続的な支援が求められる。30日、宮古市西ヶ丘

長蛇の列をつくる場面も。東日本大震災から7カ月以上が経過し、被災者の「自立」を促す目的で、物資提供を控える自治体もある中、関係者はあらためて継続支援の必要性を痛感していた。

独自に物資提供を続ける同市西ヶ丘のブックス西ヶ丘(鈴木美知子店長)「駐車場の会場に、罹災証明書を手に入れた被災者の提供を「自粛」している。県も県産業文化センター(滝沢村)に残る物資については市町村の求に応じて追加提供する方針だが、中心は義毛布や防寒着を配布し、数百枚あった毛布は1家族1枚ずつ持ち帰り「品切れ」状態と支援に向けての物資支

援は暖房器具の一部に限った。宮古市は「津波で何もなかったら本当に助かる。同市田老の自宅が流れられ雇用促進住宅で暮らす伊藤野カズキさん(71)は毛布とひ孫の紙おむつを手を感謝し

一方、市内の仮設住宅に住む女性(60)は「プレハブ住宅は寒すぎる。県からもらえる暖房器具は12月中旬らしいので、とにかく暖を取るものがほしい」と不満をこぼした。

被災地支援に取り組むNPO法人遠野まごころネットの多田一彦副代表の話。被災者の自立という言葉が使われるように生活再建と、実際に生活再建とほぼ近い状況の住民は、行政は明確に発注を移す方向性

核燃料サイクルの中心を成す高速増殖炉の原型炉もじゅ(福井県敦賀市)を運営する日本原子力研究開発機構の鈴木篤之理事長は「30日までに共同通信のインタビューに答え、実証炉や実用炉の建設を目指す従来路線を「なかまが国民には理解しにくい」と認め、原子力政策の柱を支える核燃料サイクルを支える高速増殖炉について、運営主体のトップが路線修正の必要性を言及し、必要最小限のことだけをやらせればいい」と言明。「今こそ立ち止まって、この重要性を力説し、もうじゅの利用

また「高速増殖炉を将来使ったための基本基礎」を培うことで高速増殖炉開発に熱心なロシアやインド、中国などへの技術協力が可能なこととして「日本は核燃料が世界に役立つ」と語った。

鈴木篤之は東京大学教授、原子力安全委員会の委員長などを経て昨年8月に現職に就いた。

盛岡市生まれで、5年前に亡くなった写真家渡辺克巳さんは新館歌舞伎町で「流しの写真屋」と呼ばれた。高度経済成長が始まった1960年代、3枚200円でポートレート撮影し、生計を立てた。ゲイにホステス、若者、そして寺山修司さん。夜の歓楽街に集まった人々がカメラの前で気取ったポーズを見せる。盛岡一高定時に通う傍ら毎日新聞の盛岡支局で補助員をし、写真と出合った。高校を卒業していったん国鉄に就職するものの、夢を捨てきれずに上京し、写真館で働く。新宿を中心に人間を撮り続け、82年インドに渡り、コルカタの路上生活者の中に「日本で泣くようなこと」があった。インドを見てしまえば、なんだ泣くことないんじゃないかという気がする。41年10月17日生まれ、今年生誕70年だ。記念の年に遺作を収めた写真集「新宿」を出版が発表された。新館として破竹の勢いで発展を続けるインド。一方、大災害に見舞われ、岐路に立つ日本。写真集はななくしてしまった街角や人のぬくもりに今に伝える。▼「世の中に悪い人はいます。悲しい人がいるだけです」。渡辺さんが子どもたちに残した言葉だ。地震、津波に襲われた古里。流しの写真屋が今生きていたなら、どこで、誰にレンズを向けたのだろうか。

## 再興への道

いわて東日本大震災 検証と提言

明治、昭和の二度の大津波などから復興を遂げてきた宮古市の田老地区。昭和の大津波は「100年の大計」として「万里の長城」と呼ばれる巨大防潮堤を建設した。だが、平成の大津波はその防潮堤を越えて町を破壊。200人近い尊い命を奪った。そして今、「津波防災のまち」を掲げる田老の住民は次の100年を見据えた検討を始めている。巨大防潮堤は村制時代の1934(昭和9)年着工。国は高台移転を指示したが、村には約500戸に上る住家の移転地がなかった。また、海産物を漁から背負って運ぶ時代、漁業経営を考慮し村は防

## 宮古・田老「百年の計」

防潮堤建設と避難路を整備した市街地計画を決めた。巨額工事費を理由に反対する国に対し村は単独事業を決断。その後、県事業に移行し58年に完成。79年までに二つの防潮堤が加わり総延長24333mのX型となった。ソフト対策も進め2003年、津波防災のまちを宣言した。



宮古市田老地区 1896(明治29)年と1933(昭和8)年の二度の大津波など数度の津波で壊滅。犠牲者は「明治」が1859人、「昭和」が911人。「津波田老」の異名を持つ被災のたびに復興。60年

「計画」の検討会が、それまじりの方針を打ち出した。メンバーや土地利用について議論。約20人が3班に分かれ、「安心なまち」若

者の集うまち」と未来434人に減少。今月の輪郭がみえてきた。1日現在は3951人で流出の傾向もみられる。(5)は「津波と縁が切れる。田老地区は、新たな100年の大計」には限界があり波にさらわれない津波からの地場所に住むべき。土地の買い上げなど国の支援が必要」と住宅の高台移転を主張。市消防団本部付分団長の田中和七さん(77)は「人口流出が一番心配だ。若者が夢と仕事を捨てていく。問題を置き去りにすれば元に戻る。復興とは言いえない。『真の復興』の主人公は住民。『どのようになまらしたか』の主体的議論が求められる。一方で、国は資金の復興を強力に後押しするべきだ。『これだけの大災害は国難。国が前面に立ち復興を進めるべきだ』とする原さんの訴えは重い。

もんじゅ、研究に軸足 実用化「理解得られぬ」

核燃料サイクルの中心を成す高速増殖炉の原型炉もじゅ(福井県敦賀市)を運営する日本原子力研究開発機構の鈴木篤之理事長は「30日までに共同通信のインタビューに答え、実証炉や実用炉の建設を目指す従来路線を「なかまが国民には理解しにくい」と認め、原子力政策の柱を支える核燃料サイクルを支える高速増殖炉について、運営主体のトップが路線修正の必要性を言及し、必要最小限のことだけをやらせればいい」と言明。「今こそ立ち止まって、この重要性を力説し、もうじゅの利用

また「高速増殖炉を将来使ったための基本基礎」を培うことで高速増殖炉開発に熱心なロシアやインド、中国などへの技術協力が可能なこととして「日本は核燃料が世界に役立つ」と語った。

鈴木篤之は東京大学教授、原子力安全委員会の委員長などを経て昨年8月に現職に就いた。

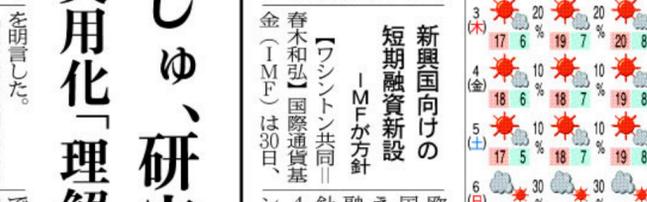
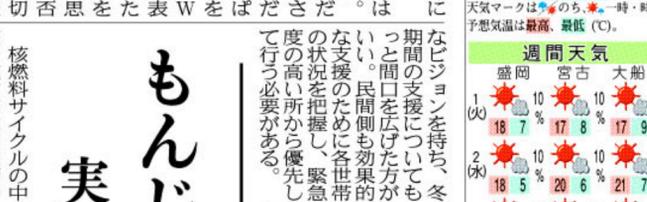
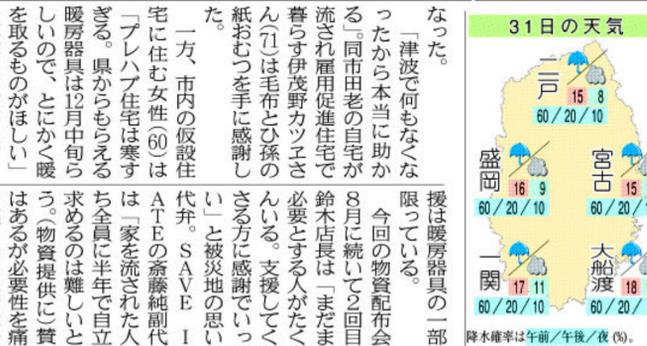
盛岡市生まれで、5年前に亡くなった写真家渡辺克巳さんは新館歌舞伎町で「流しの写真屋」と呼ばれた。高度経済成長が始まった1960年代、3枚200円でポートレート撮影し、生計を立てた。ゲイにホステス、若者、そして寺山修司さん。夜の歓楽街に集まった人々がカメラの前で気取ったポーズを見せる。盛岡一高定時に通う傍ら毎日新聞の盛岡支局で補助員をし、写真と出合った。高校を卒業していったん国鉄に就職するものの、夢を捨てきれずに上京し、写真館で働く。新宿を中心に人間を撮り続け、82年インドに渡り、コルカタの路上生活者の中に「日本で泣くようなこと」があった。インドを見てしまえば、なんだ泣くことないんじゃないかという気がする。41年10月17日生まれ、今年生誕70年だ。記念の年に遺作を収めた写真集「新宿」を出版が発表された。新館として破竹の勢いで発展を続けるインド。一方、大災害に見舞われ、岐路に立つ日本。写真集はななくしてしまった街角や人のぬくもりに今に伝える。▼「世の中に悪い人はいます。悲しい人がいるだけです」。渡辺さんが子どもたちに残した言葉だ。地震、津波に襲われた古里。流しの写真屋が今生きていたなら、どこで、誰にレンズを向けたのだろうか。

立ち上がるろう岩手

2 心のケアへアンケート  
3 野田首相に三つの試練  
4 亜炭廃坑の陥没が急増  
29 復興願い750人力走  
30 ワカサギ釣り船予約減  
31 風評被害対応に懸命

6 解説・評論 7 声、ひと、交差点  
8 生活、運勢 9 文化 10 芸能 11 青春広場  
12 ラジオ欄 13 スポーツ 14 国内  
15 沿岸、生活情報

岩手日報ホームページ http://www.iwate-np.co.jp/  
読者センター (平日9~17時)  
ファクス 019(653)8206  
Eメール dokusya@iwate-np.co.jp  
ご購読申し込みは... ☎ 0120-240840



欧州の金融危機が新興・地域(G20)首脳会に波及した場合に備えて、短期資金の融通を新設する方針を固めた。11月3、4日にフランス南西部で開かれる20カ国

その上で①新型の燃料を燃やす②廃棄物の発生量を減らす③といった新たな研究開発目的のものじゅの活用につ

た場合を想定。各国がIMFへ拠出する資金の3~5倍を限度とし1年未満の短期資金を融資する。財政構造改革などの厳しい条件は原則設けない方向。欧州の債務危機問題の深刻化で金融市場の不安が高まり、新興国では先進国からの投資資金が急速に流出。自国通貨の急落や外債準備の減少を招き、財政の資金繰りに影響が出ている。

盛岡市生まれで、5年前に亡くなった写真家渡辺克巳さんは新館歌舞伎町で「流しの写真屋」と呼ばれた。高度経済成長が始まった1960年代、3枚200円でポートレート撮影し、生計を立てた。ゲイにホステス、若者、そして寺山修司さん。夜の歓楽街に集まった人々がカメラの前で気取ったポーズを見せる。盛岡一高定時に通う傍ら毎日新聞の盛岡支局で補助員をし、写真と出合った。高校を卒業していったん国鉄に就職するものの、夢を捨てきれずに上京し、写真館で働く。新宿を中心に人間を撮り続け、82年インドに渡り、コルカタの路上生活者の中に「日本で泣くようなこと」があった。インドを見てしまえば、なんだ泣くことないんじゃないかという気がする。41年10月17日生まれ、今年生誕70年だ。記念の年に遺作を収めた写真集「新宿」を出版が発表された。新館として破竹の勢いで発展を続けるインド。一方、大災害に見舞われ、岐路に立つ日本。写真集はななくしてしまった街角や人のぬくもりに今に伝える。▼「世の中に悪い人はいます。悲しい人がいるだけです」。渡辺さんが子どもたちに残した言葉だ。地震、津波に襲われた古里。流しの写真屋が今生きていたなら、どこで、誰にレンズを向けたのだろうか。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。